

● 経常研究

ベビーリーフの品目特性と土耕栽培技術

平成21～23年（3年間）

道南農業試験場

共同（協力）機関 （檜山農業改良普及センター 檜山北部支所）

Abstract 概要

近年サラダ商品として注目を浴びているベビーリーフについて、ハウス土耕栽培(地面に直接栽培する)技術を開発しました。

ベビーリーフを構成する22品目について、春から秋における特性を明らかにしました。複数の品種を栽培する際には、播種量や窒素施肥量の適切な量、品目毎の生育日数を勘案して播種すると収穫日が揃い高い収量が確保されます。播種機を用いたり、収穫時に包丁と補助具を利用することで作業時間が短縮されます。これらの結果をもとに、栽培マニュアルを作成しました。

Results 成果

1 ベビーリーフの品目紹介

グループⅠ(生育早い)



グループⅡ(生育やや早い)



グループⅢ(生育やや遅い)



グループⅣ(生育遅い)



◎ 多長
○ □ △ × 少短

図-1 ベビーリーフの品目一覧

ベビーリーフに利用される品目はたくさんありますが、葉の色や形が単調にならないように5～10品目程度を選んで栽培します。

2 品目別・作期別播種時期の決定

いろいろな品目がミックスされたベビーリーフでは、作業効率を考慮し、一斉に収穫することが重要となります。しかし、品目や作期によって生育の早さが異なります。

このため、収穫時期を揃えるために、播種時期をずらして栽培する必要があります。

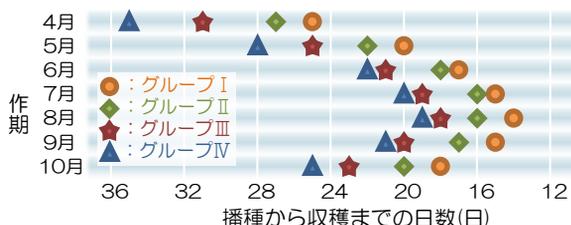


図-2 生育グループ・作期毎の播種から収穫までの日数

※生育グループは図-1 参照

Results 成果

3 播種量及び施肥量の検討

適切な播種量と施肥量について検討を行いました。

播種量は、1,000~2,000粒/m²を目安とします。ただし、春先には品目にかかわらず播種量を2,000粒/m²とし、また発芽率の低い一部の品目では通年2,000粒/m²とします。

窒素施肥量は1作あたり6g/m²とします。



図-3 播種量の違いによる収穫時の生育の様子
500粒/m²だと株の間に隙間が目立ちます

4 播種作業時間及び収穫作業時間の検討

播種機あるいはシーダテープ(等間隔で種が封入されている、ヒモ状のテープ)を利用すると、播種作業速度は手播種の10倍以上となります。

また収穫・調製の作業速度は、ハサミ収穫に比べて機械収穫で約2.5倍、包丁と補助具を用いた収穫で約2倍となります。



図-4 包丁と補助具を用いた収穫の様子

5 栽培マニュアルの作成

ハウス土耕栽培における栽培体系とマニュアルを作成しました。

栽培マニュアルは道南農業試験場のホームページよりダウンロードできます。

http://www.agri.hro.or.jp/dounan/crops/manual/babyleaf_manual.pdf

表-1 ベビーリーフの栽培体系

準備	作期(播種期): 4月(3月下旬)~10月(10月上旬)
	栽培面積: 平均収量550g/m ² より決定
	品目選定: 葉の特性(表1)を考慮し、5品目以上選択する
	N施肥量: 6g/m ²
	ハウス: 側窓に防虫ネットを張る
播種	播種期: 生育(図2)を考慮し、収穫日が揃うようにする
	播種量: 条間10cmとし、1,000~2,000粒/m ² (春先の作期では2,000粒/m ² 、また一部品目では作期を問わず2,000粒/m ²)
	播種方法: 播種機やテープシーダ(手播種に対し10倍以上の作業速度)
栽培管理	灌水: 収穫前日まで適宜(過湿に注意する)
	防除: 農薬は使用しない
収穫	収穫方法: 包丁+補助具収穫(手播種に対し2倍の作業速度で、収穫機より安価)



図-5 ベビーリーフ栽培マニュアル

Activities 業績

【発表論文等】

高濱雅幹・川岸康司・荒木和哉(2009) ベビーリーフの収量・品質特性について. 北海道園芸研究談話会会報. 43: 66-67.

高濱雅幹・荒木和哉・川岸康司(2010) ベビーリーフの収穫方法が作業時間、収量に及ぼす影響. 北海道園芸研究談話会会報. 44: 24-25.

高濱雅幹・川岸康司・菅原章人・荒木和哉・宗形信也(2011) ベビーリーフの播種密度が生育・収量に及ぼす影響. 北海道園芸研究談話会会報. 45: 76-77.

【研究成果入手先】

道総研農業研究本部の「農業技術情報広場」で、本成果に冠する概要(pdf)を公開。

<http://www.agri.hro.or.jp/center/kenkyuseika/ippan24.html>

Dissemination 普及

■本成果は、平成24年1月に北海道農業試験会議(成績会議)で普及推進事項と認定され、新技術発表会などで報告されました。

■道内各地の農業改良普及センターを通じて技術の普及が進んでいます。特に檜山北部地域において活用されています。

Contact 問い合わせ

農業研究本部 道南農業試験場
研究部 地域技術グループ

【電話】 0138-77-8116

【メール】 donan-agri@hro.or.jp

【ウェブ】 <http://www.agri.hro.or.jp/dounan/>